

## 「10年目の大柴杯スピーチコンテスト」

山田 久美子

2009年12月5日（土）に恒例の「大柴杯スピーチコンテスト」(Oshiba Memorial Speech Contest) が開催された。英語教育研究室主任の高橋里美教授による開会の辞に続いて、10周年を記念して大橋英五総長より挨拶があり、文、法、社会、経済、経営、現代心理、観光各学部の1年生から3年生まで10名の学生による熱戦が繰り広げられた。この10年を振り返り、社会や学生気質の変化とスピーチコンテストの意義、そして英語教育のあり方について考えてみたい。



大橋 英五

この英語スピーチコンテストは2000年度に始まった。この年、法学部学生で新潟県新発田市出身の大柴利信君が、入学後間もなく不慮の死を遂げた。希望に胸を膨らませた一人息子を、東京に送り出したばかりのご家族の悲しみはいかばかりだっただろう。その後まもなく、ご両親の大柴利男、順子ご夫妻は、本学に寄付を申し出られた。利信君のために用意していたものを立教大学の教育に役立ててほしい、というお気持ちであったようだ。

それは「立教大学大柴利信記念奨学金」として実を結び、毎年関東地方以外から上京した8名余の学生が、奨学金を得て勉強している。また英語が好きで、ESSで活躍することを夢見ていた利信君の遺志を受け継ぎ、英語教育に役立ててほしいとのお話があったことから、英語教育研究室が記念事業を検討することになった。

ちょうど、全国的にも新しい試みとして、1997年度にスタートした1年次8単位（理学部、法学部の一部学生は6単位）必修の全カリ英語教育が、軌道に乗ったころでもあった。必修の英語を修了した学生のために、自由選択科目が用意されたが、英語インテンシブは選抜試験を受け、週に4回集中して英語を学ぶ上級クラス。池袋・新座両キャンパスにそれぞれ複数クラス設置されたが、その成果を発表する場としてスピーチコンテストを開催することになったのである。その後、英語インテンシブが2年次生以上対象となったことから、1年次必修の上位クラスであるSクラスの学生も加わるようになった。

運営の中心となるのはランゲージ・センター所属の英語教育講師の中から毎年選ばれる大柴杯委員会のメンバー。前期から集まって運営方針を検討、スピーチのテーマを決めて、担当教員に連絡する。スピーチの審査をするジャッジは学内の英語教員の中から3名が選ばれ、厳正な基準に従い審査にあたることになる。締め切りまでに寄せられた情報をもとにプログラムを組み、印

刷して、当日の司会進行係の教員と打ち合わせをする。

一方、英語インテンシブならびにSクラスでは、クラス内スピーチコンテストが行われるなどして代表が次々と選ばれる。代表となった学生はスピーチの原稿を教員に見てもらい、クラスメートの前で練習して準備する。

今年も新しい試みがいくつかあった。まずスピーチコンテスト開催を多くの人に知ってほしいと、ポスターを学生たちが作成したこと。その結果、選ばれた1枚が公式ポスターとともにチラシとして配られることになった。漫画入りの楽しいチラシが学生動員に貢献したのは間違いない。



また当日配布のプログラムに参加学生に提出してもらったプロフィールを載せることになった。英語が必ずしも得意でない観客も、日本語のプロフィールを読めば、スピーチに親しみが感じられるだろう。

スピーチのテーマも、学生の案を取り入れた“Mottainai! Advice for change” Making the most of money, time, resources, and opportunity に決まった。「モッタイナイ」はノーベル平和賞を受賞したケニヤの女性活動家ワンガリ・マータイさんによって国際語となった日本語である。環境問題だけでなく、自分が与えられたものを生かしているかどうかという視点でのス

ピーチが観客の心をとらえたようだ。

当日は雨の土曜日にも関わらず、200名を超える学生、教職員、家族や友人たちが熱心にスピーチに耳を傾け、11号館地下の大教室は満員。スピーチコンテストを聞いて、期末試験でのプレゼンテーションが見違えるほどよくなった1年生が何人もいた。



スピーチの途中で言葉に詰まった参加者を、水を打ったように見守る聴衆。身振りを加えながら楽しそうに話しかける参加者に、笑顔で応える観客。大橋総長の挨拶にあった「言葉にして語りかけることの大切さ」が伝わったように思われる。

休憩をはさんで10名のスピーチがすべて終わると、ジャッジ3名は別室で協議して、1位から3位までを決定する。結果を報告する審査委員長の言葉どおり、優劣つけがたく難しい作業であろう。優勝は法学部1年、中山佑華さんの“My Mottainai Campaign”、2位には経済学部2年、工藤優太君の“To be Active Brings a Lot of Chances to You”、3位には経営学部1年、石原大輝君の“The Hidden ‘Mottainai’: The World Full of Opportunities to Develop your English”が選ばれた。悲喜こもごもの結果となったが、スピーチをした学生も指導した教員も、授業とはちがう雰囲気の中での力試しに満足した様子であった。

大柴ご夫妻のご寄付による賞品は、最初は優勝カップのレプリカと参加証だけであったが、やがて2位の銀メダル、3位の銅メダル、さらに副賞の図書カードと次第に充実していった。今年は10周年を記念して、参加者全員にボールペンが贈られた。



英語に限らず、学んでいることが、このような形でメッセージを発信するのに役立っていると実感することが、学習の動機づけとして大切である。受け身といわれる最近の学生でも、自主性を尊重し、少し後押しをすることで、驚くほど力を発揮することがある。特に英語に関していえば、身近な仲間、

長期の海外生活を体験していない人でも、努力次第で英語で素晴らしいスピーチができるのを聞いて、勇気づけられる学生は多い。最後に全カリ言語教育科目構想・運営チームリーダーの谷野典之教授による閉会の辞で、第10回大柴杯スピーチコンテストは幕を閉じた。

スピーチコンテストをここまで支えてくださった教職員、学生、ご家族、聴衆の皆様、そして雪の新潟で毎年温かく見守ってくださる大柴ご夫妻に心から感謝申し上げます。18歳で亡くなられた利信君は、生きていれば28歳の働き盛りの青年となっていたはずだ。数年前、新発田市を流れる加治川近くの市営霊園にある利信君のお墓にお参りする機会があった。堤防の桜並木が青葉を茂らせ、木陰を作る気持ちの良い場所である。ご両親は毎朝の墓参りを欠かさないと伺った。永遠の命とはこのようなことをいうのだろう。大柴君とご両親を思うことは、生きることを考えることである。利信君の誕生日に近い日に開催される大柴杯スピーチコンテストの今後益々の発展を願っている。

やまだ くみこ  
(本学異文化コミュニケーション学部教授/  
全学共通カリキュラム運営センター  
英語教育研究室大柴杯委員)